

## 第5章 赤平(3)遺跡出土の擦文土器について

### 1. 概要

擦文土器は、調査区北西域の限られた範囲から出土している。北西域は、台地平坦部から、北側を東流する七戸川に向かう斜面地である。この斜面地に壕跡（第1号壕跡）とその内側に住居跡が検出され、擦文土器もほぼこの範囲から出土した。平成16年度にこの範囲を中心とし、翌年の調査時にもその一部を調査し、擦文土器の出土がみられた。擦文土器は、これまで青森県内では、津軽や下北地域で多く出土する一方、当遺跡が位置する上北地域での出土はほとんどなく、まとまった出土資料が得られたのは初めての事例になる。ここでは、1項を設けて出土土器について詳細に分析し、位置づけを行うこととする。

(1) 出土遺構 擦文土器が出土した遺構は、第1号壕跡とその内側の8軒の住居跡から出土し、壕の外側の第1号住居跡、第4号溝跡、更に外側の第3号溝跡からも出土している。特に出土量の多いのは、壕の外側の第4号溝跡で、次いで第1号壕跡である。これらは、遺構間同士で接合するものもある。一方、8号・9号・11号住居跡は、各1点のみで、ほとんど出土していない。

(2) 出土量 出土量は、総破片数293、総重量6197.7gである（表1）。破片数と重量における遺構毎の割合は、双方とも大差なく第4号溝跡が突出し、次いで第1号壕跡である。両者の規模を考えれば、前者により集中することは明らかである。第7号住居跡出土の重量に占める割合が破片数に比べて高くなっているのは、厚手の土器（図1-2）の出土によるものと思われる。

(3) 出土状況 その多くが遺構内からの出土で、2割から3割が遺構外である。しかしながら、遺構内出土の多くが覆土出土で住居床面やカマド付近、または底面出土は少ない。第2号・3号住居跡では床面直上、第8号・9号住居跡ではカマド覆土から破片が出土した。第7号住居跡では、北側調査区際のカマド袖と推定されるローム塊の底面付近から特徴的な擦文土器（図1-2）が出土している。このローム塊がカマド袖だとすれば、これらの土器はカマド袖の芯材の可能性があり、この住居跡とほぼ同時期か、前段階と考えられる。壕内側の住居跡では、全形が復元できるような個体資料は、床面やカマドに明確に伴う形では出土していない。

第1号壕跡については、多くが覆土中に分散する形で出土している。ただ、壕跡西部で底面または底面直上で木製品などと共に個体資料（図1-1）が出土している。また、破片資料（本文図253-4・10）が壕北西部の覆土下層と底面から出土した。最も多く擦文土器が出土した第4号溝跡においては、覆土上位で土師器とともにまとめて廃棄された状況で出土している。覆土下位では遺物の出土は少ない。溝が、ある程度埋まった段階で短期間に廃棄された様子を示している。壕の外側の第1号住居跡覆土、第3号溝跡からも出土しているが斜面地ゆえに上方からの遺物の流れ込みも考えられる。出土状況をまとめると以下のようになる。

①台地縁辺部の斜面地を利用した大規模な壕跡とその壕に囲まれた住居跡を中心とする範囲のみからの出土である。

②擦文土器出土遺構から土師器も多く出土したが、須恵器の出土は、わずかで小片が多い。

③壕の底面からも出土し、壕跡の機能時と擦文土器の年代が同時または近時の可能性が高い。ともに出土した木製品も同時の可能性が高い。

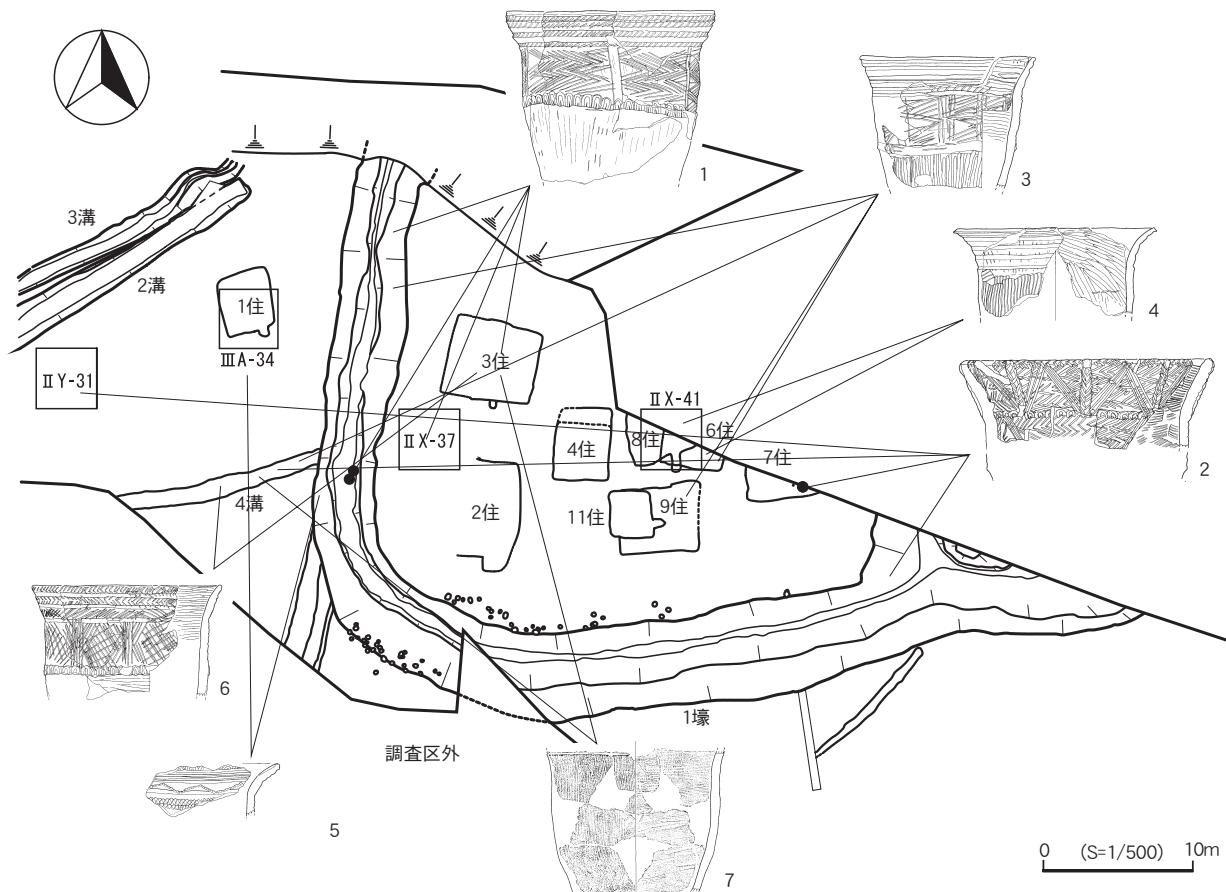
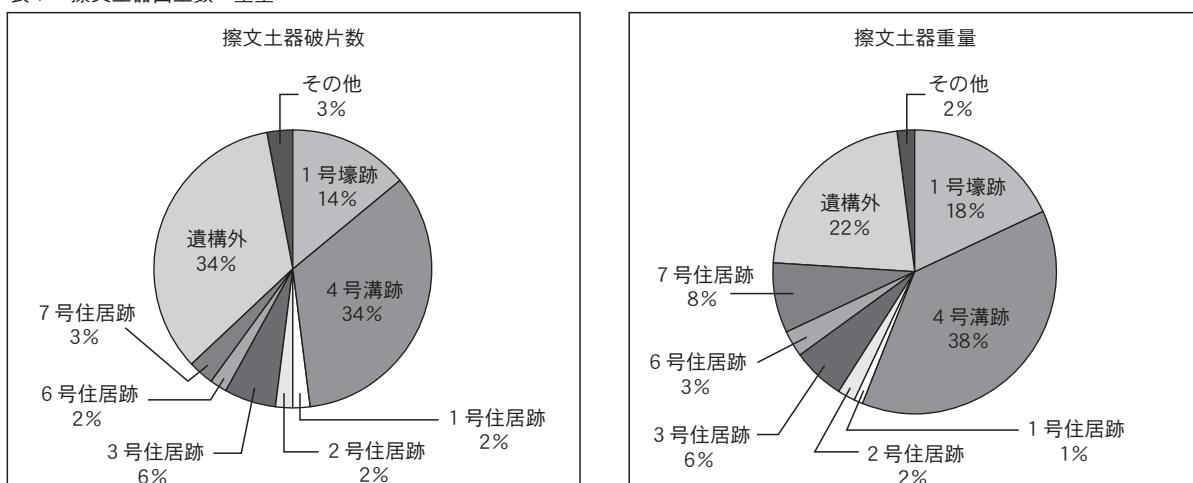


図1 接合関係図

表1 撥文土器出土数・重量



遺構	破片数(掲載)	破片数(非掲載)	遺構別総破片数	重量(掲載)	重量(非掲載)	遺構別総重量
1号壕跡	32	5	37	1031.2	74	1105.2
4号溝跡	76	32	108	2118.7	264.7	2383.4
1号住居跡	4	2	6	59	8.3	67.3
2号住居跡	5	1	6	124.3	10.7	135
3号住居跡	13		13	345.2	0	345.2
6号住居跡	4	1	5	170.2	9.9	180.1
7号住居跡	7		7	449.2	0	449.2
遺構外	75	25	100	1258.2	150.1	1408.3
その他	7	4	11	97	27	124
合計	223	70	293	5653	544.7	6197.7

- ④住居の床面から個体資料または大きな破片がまとまって出土していない。  
 ⑤特に第4号溝跡では、覆土上層から土師器とともに多量に出土しており、ある時期にまとめて廃棄された可能性が高い。  
 ⑥出土総数293片であり中里城・蓬田大館遺跡・古館遺跡などとともに本州における1遺跡の出土数としては極めて多い。

(4) 接合関係 遺構間の接合関係を示したのが図1である。接合関係のないものでも明らかに同一個体と思われるものはここに含めた。接合関係にある遺構は、第2号・3号・7号住居跡間と第4号溝跡、第6号・9号住居跡間と第1号壕跡、第1号壕跡と第4号溝跡である。続いて同一個体と思われる資料がどの程度の範囲に破片が分散しているのかを分析し、伴う可能性のある遺構と廃棄された遺構との関係を検討する。分析資料は、接合して、ある程度の大きさに復元できる個体資料を中心とする。これらの資料を個体資料1～7とする（表2）。

個体資料1は、第3号住居跡覆土と南西方向の近いグリッドならびに第1号壕跡底面直上、第4号溝跡覆土から出土し、比較的狭い範囲にまとまっている。3号住居で使用されたものか定かではないが、1号壕跡など南西方向への廃棄が想定される。2は、第7号住居跡カマド袖付近から出土しており、遺構との関連性が高い。また、第1号壕跡覆土と第4号溝跡覆土、更に西のグリッドとやや広めに分散している。1と同様に西方向への廃棄が想定される。3は、第6号住居跡覆土と第9号住居跡カマドから出土し、これらの遺構との関連が強い。また、第1号壕跡や第4号溝跡の覆土からも出土し、西方向への廃棄が想定できる。4は、第6号住居跡カマド付近から出土しており、この遺構との関連が考えられる。破片数が少ないため廃棄の方向は不明である。5は、第1号住居跡付近のグリッドと1号壕跡から出土している。1号住居に伴うものかは不明である。6は、第3号住居跡のカマドから出土し、同遺構に伴う可能性がある。

7は、第3号住居跡と4号溝から出土しており、南西方向への廃棄の様子が想定できる。

以上の個体資料の分散の様子は、壕の内側の住居跡などから壕や溝、特に南西方向の4号溝といった遺構への最終的な廃棄の様子が窺える。

(5) 個体数 個体数の把握については、大半が小さな破片資料であり難しい。しかしながら主に口縁部文様の違いによっておおよその個体数の把握は可能である。この口縁部文様による個体識別に加えてこれらと同一でない復元個体資料、さらに底部破片等を加えて個体数の算出を試みることにする。

表2 接合・同一個体資料

個体資料	図版番号	出土遺構
1	本文図214-22、253-12、260-31、265-13	4溝覆土、1壕底面直上、3住覆土、遺構外（II X37）
2	本文図215-18・19・22、253-9、265-17・26	4溝覆土、1壕覆土、7住カマド袖、遺構外（II Y31）
3	本文図215-13、217-12、261-2	4溝覆土、1壕覆土、6住覆土、9住カマド
4	本文図215-12、265-20	6住カマド、遺構外（II X41）
5	本文図253-3、265-21	1壕覆土、遺構外（III A34）
6	本文図214-23・25、260-32・33・34	4溝覆土、3住カマド
7	本文図214-27	4溝覆土、3住覆土

当然のことながら調査範囲内の個体数の算出である。

口縁部文様の違いによる明らかな個体数は、15である。また、ある程度器形が復元された個体は、5個体で先の15個体とは異なるものである。底部破片は7片出土しているが、明らかに別個体は5個体である。これらの底部片が先のどの個体に対応するかは接合関係がなく明確でない。また、当遺跡出土資料に比較的多く施される胴部下半貼付帯の個体識別のみで、少なくとも13個体が把握できる。貼付帯による識別個体数と先の復元個体資料、口縁部文様による識別個体数との重複を考慮しても20個体を算出できる。この数字は、最大限の重複を考えたものであるので実数はこの数字をやや上回るものと推定される。

## 2. 出土土器の観察

(1) 胎土 胎土については、本報告で松本氏の化学成分測定による胎土分析が行われているため、肉眼観察からわかる点を述べたい。当遺跡出土擦文土器には、白色の針状物質、いわゆる海綿骨針が混入するものが多く、大きめの礫の混入は少ない。実見した蓬田大館遺跡出土資料においても海綿骨針の混入が認められ、この点は当遺跡と共通する点である。

(2) 色調 北海道等他地域出土の擦文土器との違いを示す一つの要素として、また当遺跡出土の擦文土器は赤味がかったものが目立ち、特徴を捉えるためにも色調による分類を行った。分類については、大まかな色調を捉えるため、以下の6分類とした(表3)。

表3 色調分類基準

分類記号	色調	土色帖	特徴
A	黒褐色	10YR1.7/1相当	黒または黒味がかったりいるもの。およびそれに準じるもの。
B	暗褐色	10YR3/3相当	いわゆるこげ茶色。黒褐色に含まれず、褐色より暗い色。
C	褐色	10YR4/4相当	いわゆる茶色。暗褐色よりも明るい色。
D	黄褐色	10YR6/6相当	黄色味がかったりいるもの。褐色よりも明るい色。
E	赤褐色	2.5YR5/6相当	いわゆる肌色や赤味がかったりいるもの。
F	灰褐色	7.5YR5/1相当	灰色がかったりいるもの。

\*色調の基準は、新版標準土色帖(1996年版)による。また、分類記号は、擦文土器観察表に対応する。

掲載数153点の色調毎の数は、以下の通りである。

内面 A 39 B 35 C 23 D 0 E 33 F 23 (点数)

外面 A 24 B 35 C 30 D 0 E 36 F 29 (点数)

Dの黄褐色以外は、ほぼ同じ割合である。次に外面の色調は、黒色系のAが全体の15%、褐色系のB・Cが合わせて42%、赤色系のEが24%、灰色系のFが19%あまりである。褐色系を主体とし、赤色や黒色、灰色も少なからず存在する。また、内面黒色の24点の内、黒化処理されたと思われるものは6点である。

(3) 器面調整 全体に粗密はあるが、内外面とも比較的丁寧に調整がなされている。主たる調整は、ハケメとミガキである。内面は、①ミガキ、②ハケメ、③ハケメ後ミガキに分けられる。そのほとんどがミガキで横方向が多い。②と③は少数で、③は横ハケメ後縦ミガキのものが多い。①の中には、肉眼では不明確であったが、ミガキの前にハケメ調整がなされたものもあると思われる。一方、外面

は、①ハケメ、②ナデ、③ミガキに分けられる。①がほとんどであり、縦方向が主体である。②は、口縁部など刻線文施文部位にみられることから、文様の施文に伴い付けられたものと考えられる。③は、胴部下半にみられる場合がある。出土土器は、小破片が多く、観察する部位による違いも考えなくてはならない。続いて、特に外面のハケメ調整については、一様でなく条間の粗密による違いが認められた。全体に粗いハケメであるが、分類すると①粗いハケメ（本文図262-4・265-20等）②やや粗いハケメ（本文図215-22・253-16等）、③細かいハケメ（本文図261-3・12～17等）となる。②が主体で、①も少なからずあるが、③は少數である。③は、他よりやや薄手で胎土・文様においても違いがみられる。

### 3. 出土土器の分類

その多くは小さな破片資料であり、器形全体を復元できる個体はない。およそ上半分復元できるものが5個体である。文様構成や器形の分類は、ほとんどが破片資料という制約から主に口縁部から胴部上半部に限定されると言わざるを得ない。幸い、擦文土器は口縁部から胴部上半に刻線文が施されることから分類は可能と思われる。県内での擦文土器の分類は、蓬田大館遺跡の報告や齋藤淳氏による分類がなされており、これを主な参考として比較を行う。

#### (1) 文様構成による分類

A類 口唇部に刻み、口縁部から胴部上半に地文として綾杉文を施文し、重ねて山形沈線や貼付文を付加するもの。（本文図215-18・19）

B類 口縁部に横走沈線文と刺突文（短刻文）を施し、胴部に刻線文を施文するもの。この類の刺突文には、一方向に連続施文するものと異なる方向に連続施文するものに分類され、前者を1種、後者を2種とする。

1種 斜行刺突文（本文図215-13、253-12、260-35）

2種 矢羽根状刺突文（本文図260-32～34、261-1）

C類 口縁部に横走沈線文を施し、頸部から胴部上半にかけて山形の連続刺突文（結節沈線状）を施すもの。口唇部に馬蹄形圧痕文を施文する。（胴部下半は不明）（本文図253-3、265-21）

D類 口縁部に横走沈線のみ施文するもの。（本文図214-20・21・27、215-12、261-4～7、265-20）

#### (2) 貼付帶による分類（図2）

1類 鋸歯状文（本文図261-3）

2類 馬蹄形圧痕文 a種 馬蹄形が3～4重の細かい施文のもの。

（本文図214-8、253-3・10、265-21・36）

b種 馬蹄形が2重の施文のもの。（本文図215-18・19、253-12等）

c種 簡略化が窺えるもの。粘土貼付がない場合もある。

（本文図261-1・9・10・11、265-34・35）

馬蹄形圧痕文の原体分析については、蓬田大館遺跡の報告に詳しい。本分類では、外見上の特徴からの大まかな分類である。

次に蓬田大館遺跡報告書と齋藤氏による分類を示し、当遺跡の分類との対応関係を示す。

以上の分類と当遺跡出土擦文土器との対応は表4に示した。

『蓬田大館遺跡』報告書の擦文土器分類（豊田宏良「C 擦文土器」より）

- I群 口縁部に横走沈線文と刺突文を施し、胴部に刻線文様を施文するもの。
- II群 口縁部に横走沈線文と刺突文を施し、胴部に刻線文様を施文しないもの。
- III群 口縁部に横走沈線文のみを施文するもの。
- IV群 口縁部にも胴部にも文様を施さない無文のもの。

齋藤淳氏による擦文土器分類（「本州における擦文土器の変遷と分布について」より）

- I類 口縁部から胴部上半に多条横走沈線文を施し、重ねて刻線文を付加するもの。
- II類 口縁部に横走沈線文と刺突文を施し、胴部に地文として多条横走沈線と刻線文を施文するもの。
- III類 口縁部に横走沈線文と刺突文を施し、胴部に刻線文様を施文するもの。
- IV類 口縁部に横走沈線文のみを施し、胴部に簡素な文様を施文するもの。
- V類 口縁部に横走沈線文のみを施文するもの、無文のもの。 (一部要約)

3者の中を比較すると蓬田、赤平とも齋藤I・II類を欠き、III類から認められる。氏のI・II類にみられるような胴部上半に施される地文としての多条横走沈線は、一部に文様として施されるほかは基本的に両遺跡では見受けられない。蓬田II群については赤平では確認できない。齋藤IV類は、蓬田、赤平とも欠いている。また、赤平では、蓬田IV群を欠く。次に他の類の比較では、蓬田には赤平A・C類は確認できず、赤平C類の口唇部にみられる馬蹄形圧痕文は、蓬田では認められない。ただ、C類の結節沈線状の連続刺突文は、口縁部に施すものが見受けられる。赤平A類は、類例がほかにみられない文様構成の土器であるが、文様要素として口縁部に単独あるいは三叉状に施文される縦位貼付文が蓬田の土器にも見られる。赤平ではみられないボタン状貼付文も数個体に認められる。しかしながら、A類のような口唇部の矢羽根状の刻みは確認できない。また、貼付帯においては、両遺跡とも馬蹄形文が卓越し、赤平で1点のみ鋸歯状文である。赤平では、貼付帯は胴部下半の施文がほとんどであり、すべて单帶である。一方、蓬田は、胴部下半が主体であるものの、頸部付近への施文も少なからずある。文様構成については、文様の複段化が窺われるものは蓬田に少数見られるのみで、青森県全体でも複段化のみられる個体はほとんどない。

(3) 器形（口縁部から胴部上半部）による分類（図3）

- I類 口縁部文様帯が幅広で、頸部から直線的に開くもの。（本文図215-18・19）
- II類 口縁部文様帯がI類より狭く、頸部からやや大きく開き口縁部は直立するもの。  
(本文図253-12)
- III類 口縁部文様帯の幅はII類と同様であるが、頸部からの開きが弱く直立しないもの。この類は、胴部下半から口縁部にかけて緩やかに開く器形のものも見受けられる。  
(本文図215-13、260-32・33・34、261-2)
- IV類 頸部からやや膨らみながら開き、口縁部が直立気味のもの。（本文図260-35、261-1）
- V類 頸部からの外反が強い、いわゆるラッパ状を呈するもの。この類は、胴部がやや膨らむ器形

のものが見受けられる。(本文図214-21・27、215-12、261-7、265-20)

本遺跡のⅠ類は、基本的に齋藤氏分類のⅠ類にみられる器形に似ている。この類は、白頭山苦小牧火山灰降下以前の9世紀後半から10世紀中葉を下限とする年代が与えられている。次にⅡ類は、口縁部の張り出しや直立具合が北海道の該期の擦文土器に比べてやや弱い傾向も見出されるが、全体として本来の器形を保つものと考えられる。Ⅲ類は、Ⅱ類に比べて全体的に器形の変化が明瞭でなく、本来の器形からの崩れが見受けられる。Ⅳ類は、Ⅲ類に比べて口縁部の張り出しが強いが、Ⅱ類より直立の度合いが弱い。

表4 分類対応表

蓬田大館遺跡分類	齋藤氏分類	赤平(3)遺跡分類	出土遺跡例
(一)	I類	(一)	小三内、三内丸山(2)遺跡
(一)	II類	(一)	杁沢遺跡
I群	III類	B類	蓬田大館遺跡
II群	(一)	(一)	蓬田大館遺跡
(一)	IV類	(一)	古館遺跡
III群	V類	D類	蓬田大館遺跡・上野遺跡
IV群		(一)	蓬田大館遺跡

※ (一) は該当資料なし

#### (4) 口唇部による分類 (図4)

1類 角張る形状のもの (本文図253-2、260-29.35、261-1.7、265-10.11)。

2類 角張る形状で凹面となるもの (本文図214-21、215-12、265-20)。

3類 外側に稜を有する形状のもの (本文図215-18.19)。

4類 丸い形状を呈すもの

(本文図214-20、215-13、253-4.12、260-26~28.30.32~34、261-6、265-13.16.19)。

3類は、1類との区別が難しいが、外側に施文のための平らな面を意識的に作り出していると思われるところから分けられる。この面によって稜がみられる。

#### (5) 各属性分類の対応関係

本遺跡の各分類の対応関係は表5の通りである。

A類は、貼付帯で、B類とほぼ共通するが、器形・口唇部形態は他の類とは異なっている。B類は、1種と2種とも器形Ⅲ・Ⅳ類が認められるが、器形Ⅱ類は1種のみである。C類は、基本的にB類1種Ⅱ類と共通するが、貼付帯の馬蹄形文の形態と貼付部位において異なる点がある。D類は、器形・口唇部形態ともに他とは異なる特徴が見られる。

### 4. 本遺跡出土擦文土器の特徴

以上の観察・分類から、特徴をまとめた。

①色調が赤褐色(E)のものが全体の約1/4と多く、黒色(A)のものはやや少ない。

②器壁が総じて厚く、1cm以上の個体も多い。

③胎土に海綿骨針を含むものが主体的である。

- ④器壁内外に煤等の付着がほとんどみられず、使用の痕跡が肉眼ではほとんど窺えない。
- ⑤文様は、口縁部の幅広な横走沈線にみられるように総じて施文の仕方が粗い。
- ⑥底径等から小型の土器はみられず、壺形土器もない。長胴甕のみである。
- ⑦器面は平滑で丁寧に調整されるものが多い。
- ⑧内外面のハケメ調整、特に外面は、条の間隔が粗いものが多い。
- ⑨津軽地域などで出土している、調整技法・器形等、土師器から影響を受けたと思える折衷的な土器は出土していない。
- ⑩個々の文様要素は擦文土器本来のものであるが、その構成において当遺跡独自の土器（A類・本文図215-18）が出土している。

表5 属性分類対応表

※（-）は該当なし

文様構成	器形	口唇部	貼付帯
A	I類	3類	
B	1種	II類	2類 b 種
		III類	
		IV類	（-）
	2種	III類	2類 b 種
	IV類	1類	2類 C 種
C	II類	4類	2類 a 種
D	V類	2・4類	（-）

## 5. 本遺跡出土擦文土器の編年的位置づけ

当遺跡の場合、先に述べたように数多くの破片が出土しているものの、短期間にまとまって廃棄されたような形であり、出土状況から土器の新旧関係を論じることは難しい。そこで主に土器の文様・器形という属性から、当遺跡出土擦文土器の型式的な差異について考察することとする。

これまで本州における擦文土器の編年については、1977年に高杉氏により示されたことがあったが、それ以降、資料数の制約のためか編年は深められなかつたと言える。しかしながら近年、齋藤淳氏による新たな編年案が示され、また資料数の増加もあり、本州側での編年の必要性が高まっている。北海道では、11世紀になると土師器や須恵器といった遺物が伴出せず、特に擦文土器編年の後期以後は、本州側での編年を示すことが今日求められているようである。本報告では、基本的に齋藤氏の編年案を参考とし、本遺跡出土の擦文土器の位置づけを示すものとする。加えて北海道道央部との類似性も見出されるため、全道的な資料から編年を行った佐藤達夫氏の新編年（昭和47年）とそれを基礎とした宇田川編年（昭和54年）、また石狩低地帯を中心に後期の資料を扱った中田氏、豊田氏の見解、そして近年、地域差に触れた編年案を示す塙本氏の見解を主な参考とする。

(1) 本州における編年的位置 本遺跡出土の多くの擦文土器は、齋藤氏分類のIII類とV類に相当する。III類とV類は、時期的に併行関係とされるが、共伴して出土することは少ないようである。青森県内では、擦文土器が多数出土した古館遺跡や中里城跡、北海道では札前遺跡などを例にとってもほぼV類のみと言ってよい。共伴例としては、蓬田大館遺跡8号や14号住居跡が挙げられる。本遺跡においても3号・6号住居跡、4号溝跡で両類が出土している。また、III類主体で馬蹄形圧痕文を施す土

器が卓越することも、蓬田大館遺跡と本遺跡の共通点である。以上のことから、本州における擦文土器の編年的位置は、型式的にみれば、蓬田大館遺跡の土器とほぼ同段階と考えられる。

(2) 北海道における編年位置 当遺跡のB類は、北海道の編年に当てはめれば、胴部上半の多条横走沈線の消失を大きな指標とする後期に相当する。佐藤氏新編年のIV期、宇田川編年の後期前半と考えられる。また、中田氏の後期第1期、塚本氏の8期、鈴木氏のIV-A、IV-B類に相当するものと思われる。中田氏の第1期には、口縁部に横走沈線のみの土器も含まれている。しかしながら、北海道では、胴部文様の複段化も後期における指標であるが、本遺跡を含めた本州側では、この点が明確でないため、北海道の編年をそのまま当てはめることが難しい。本遺跡の見解としては、B類の刻線文土器にみられるような口縁部が張り出し直立する器形、横方向の綾杉文の充填、胴部下半の馬蹄形圧痕施文の貼付帯を主な根拠として上記の諸氏の編年に当てはめたものである。しかしながら、塚本氏の8期は、11世紀後半、中田氏の1～2期は12世紀代に及ぶ可能性、鈴木氏のIV-A・B類は10世紀末以降と見解が異なり、本州の年代ともずれがみられる。ただ、編年当時の塚本氏の年代の根拠として五所川原須恵器窯の操業停止を11世紀半ばに、中田氏も十和田a火山灰の降下を10世紀後半から11世紀前半を前提とするものであり、今日の五所川原須恵器窯や火山灰降下に関する研究成果からすれば、これよりも年代的に古くなるものと考えられ、本州側との時期差も縮まるものと考えられる。

(3) 型式学的変遷とその系譜(図5) 本遺跡の場合、型式的に異なるものが見受けられることから、その変遷、時期差の可能性について検討する。

まず、本遺跡のA類は、1個体分のみ確認され、器形(I類)・馬蹄形圧痕文・綾杉文・口縁部縦位貼付文・口唇部の矢羽根状の刻みといった属性に特徴付けられる土器である。個々の属性は、北海道の擦文土器にも見られるものであるが、その構成では今のところ他に類例がみられないものである。器形(I類)は、本州側においても白頭山火山灰降下以前の10世紀中葉を下限とする時期にみられ、古い段階の器形と考えられる。馬蹄形圧痕文は、白頭山火山灰降下以降の特徴とされ、馬蹄形(2類)でもb種は、本遺跡において主体の文様である。綾杉文は、北海道でも中期末には坏形土器にすでにみられるが、盛行するのは後期になってからである。道央や日本海沿岸北部、道南日本海沿岸でも後期前半土器の文様要素に採用されている。次に口縁部の縦位貼付文であるが、青森県内では蓬田大館遺跡で出土しており、縦位や三叉状、ボタン状の貼付文がみられる。また、ボタン状貼付文は、津軽地域においてもみられる文様要素である。北海道では、道央部に多く、石狩低地帯の千歳市・美々8遺跡、厚真町・上幌内モイ遺跡、噴火湾沿岸の伊達市・南有珠7遺跡など特に南部での出土例が目立つ。口唇部の刻みについては、地文に多条横走沈線を施文する古い段階の土器に認められるが、矢羽根状となると苦小牧市・タブコブ遺跡例など後期の土器に少量みられるようである。A類の土器は、器形において古い要素があるが、その他の要素では、白頭山火山灰降下以降の特徴を持つ土器と言える。そして、土器の系譜としては、文様の諸要素から道央部でも南部の土器の影響が強いと考えられる。

B類の土器では、II類・III類と、器形に違いが認められ、II類は器形の崩れはなく、文様も明確に施文されている。一方、III種では、器形にめりはりがなく、崩れがみられる。文様においても口縁部の刺突文がほぼ消失する個体も認められる。このことからB類においては、II類からIII類の変遷が推定できる。また、1・2種ともIII・IV類の器形があり、器形IV類の土器は文様要素において胴部の斜



図2 貼付帯分類

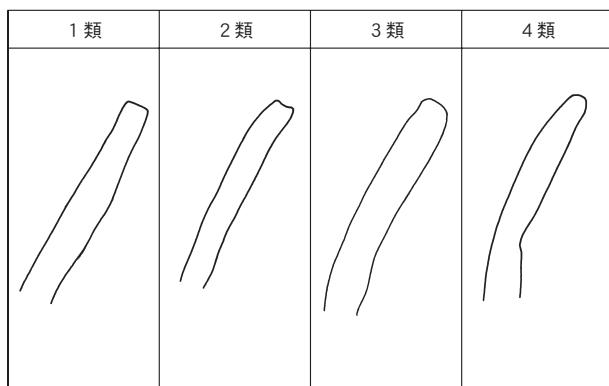


図4 口唇部分類

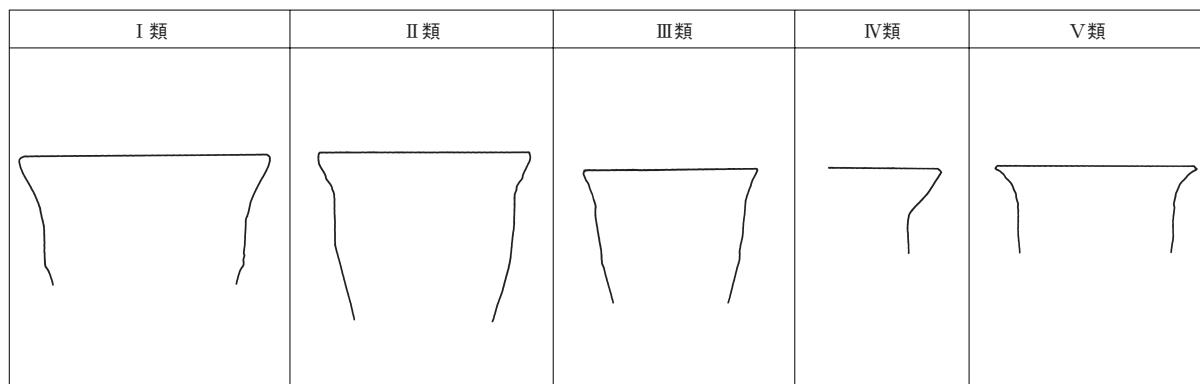


図3 器形分類

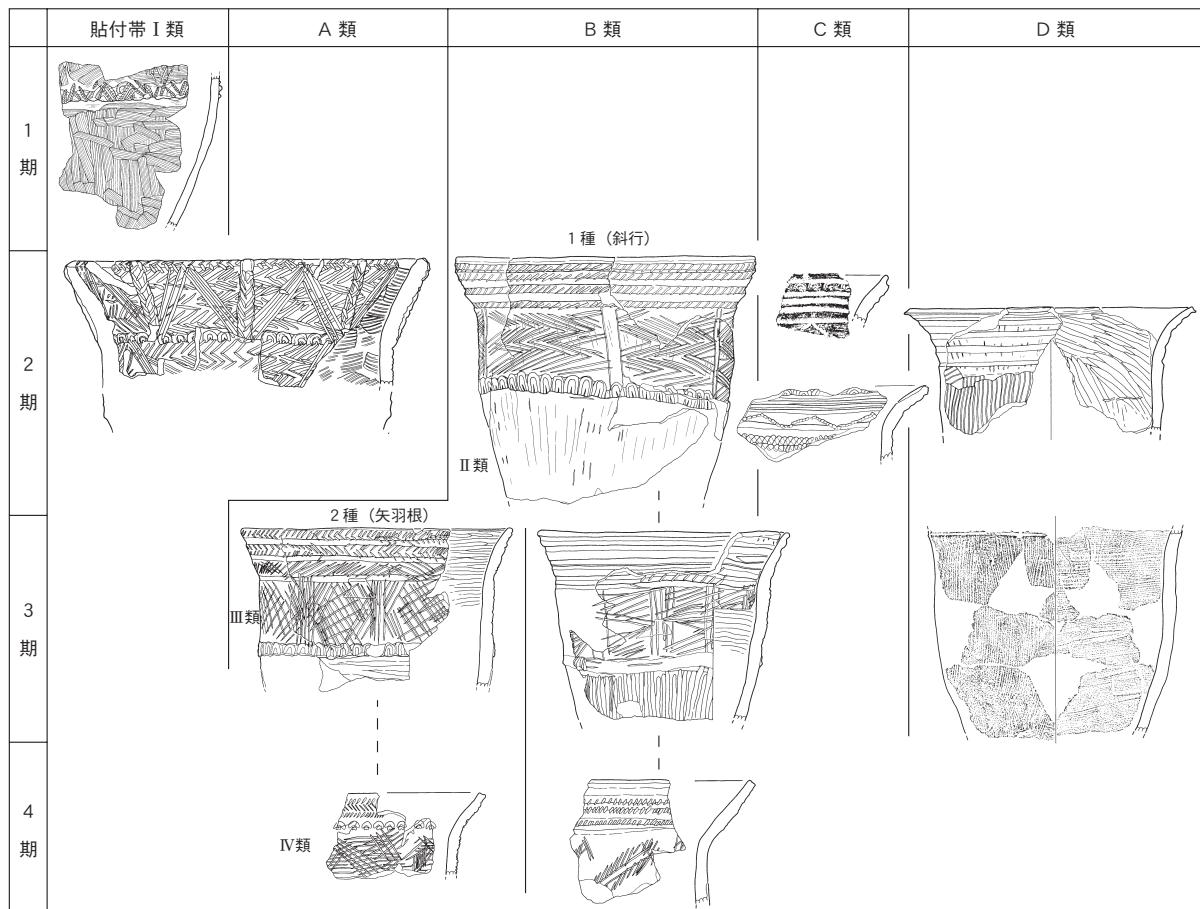


図5 赤平(3)遺跡擦文土器編年案

行沈線に沿う短沈線（列点文）や簡略化したような馬蹄形圧痕文（2類c種）がみられる。この短沈線は、北海道において本遺跡の器形Ⅲ類のように変化が少なく、口縁部に向かって広がる器形の土器に見受けられる。後期でも後半以降と考えられる。また、分類には漏れたがB類に含まれると思われる貼付帯1類の鋸歯状文を施す土器は、ハケメ調整の条間が細かく、器壁も薄く、胎土も他の土器とは見た目上異なる。貼付帯に施される文様の変遷については、豊田氏が鋸歯状文から馬蹄形圧痕文への変化を示唆しており、どれほどの時期差があるものか明確でないが、鋸歯状文は相対的に馬蹄形文より古い要素と言える。型式的に古い段階の土器と言えるかもしれない。

また、出土状況では、第1号壕跡では、A類やC類、B類1種器形Ⅱ類の土器が出土するのに対して、第4号溝跡では、B類の器形Ⅲ類やⅣ類、D類が主体である。両遺構では、出土する土器の類が異なる傾向もみられることから、時期差の可能性もある。

以上のことから、本遺跡の刻線文土器については、貼付帯1類→B類1種器形Ⅱ類→B類1・2種器形Ⅲ類→B類1・2種器形Ⅳ類への変遷が推定される。

また、口縁部に横走沈線のみのD類は、ラッパ状に広がる器形と口唇部の凹面を特徴とする土器である。口唇部に凹面を持つ土器は、中里城跡や古館遺跡などでも出土しており、道南の札前遺跡では、器形も似ているものがある。このことから系譜は、道南や津軽地域に求められそうである。B類などの刻線文土器との時期差については、本遺跡の出土状況では不明確であるが、第3号住居跡では、ほぼD類のみが出土し、壁柱穴が巡る住居の構造は津軽地域などでは相対的に新しい要素である。また、須恵器も出土していない。壕の内側でこのような構造の住居は、ほかに2号、9号などにみられ、時期差を表す可能性がある。

本遺跡出土の擦文土器は、先の分類からA類、B類のなかでの3細分、D類、貼付帯1類の計6型式あるものと思われる。また、時期差については、B類のなかで型式的な変遷が3時期見出され、馬蹄形圧痕文に型的に先行すると考えられる鋸歯状文の個体がみられることから、計4時期あるものと推定した。A類とD類については、出土状況からも型式学的にもB類との前後関係が不明確であるため、併行関係にあると考えた。

## 6. まとめ

(1) 年代について 齋藤氏は、氏のⅢ類の年代を共伴する甌や把手付土器を根拠に10世紀中葉から11世紀前葉とし、また、V類をⅢ・Ⅳ類と共に共伴することから10世紀中葉から11世紀中葉とする。これに従えば本遺跡のB、D類も同様の年代となるが、年代の根拠が薄弱であることは否めない。また、他の遺物との共伴関係は、須恵器片が同じ遺構の覆土から少量出土する程度であり、大型破片が明確に伴って出土する状況に無い。

これら出土した須恵器は、本報告での三辻氏の胎土分析によって五所川原産の可能性が高いという結果が出ている。上記のような須恵器の出土状況は、いわゆる防御性集落における出土状況と似ている。最近、藤原氏は、五所川原産須恵器窯の操業期間を窯数と操業年から推定し、操業停止を短くて10世紀第3四半期、長くて10世紀第4四半期と考えている。須恵器の出土状況からは、10世紀後半以降の年代が考えられる。また、共伴する土師器については、一部を除きおおむね10世紀後半以降の特徴がみられるが、下限の年代については、11世紀代の指標を捉えることが難しく、不明確である。ほかに年代決定の手がかりは、第1号壕跡底面と第9号住居跡出土の把手付土器2点である。こ

の点からも少なくとも10世紀中葉以降と考えられる。以上から、当遺跡出土の擦文土器の年代は、10世紀後半から11世紀前葉または中葉までと推定する。年代の下限についての根拠は、薄弱である。

いずれにしても本州における擦文土器分布の拡大期および出土数の増加期であり、これまで擦文土器の空白地帯であった上北地方での出土ということからも、整合性があり、該期に相当するものと考えられる。

(2) 他地域との影響関係について 上記のように本遺跡の分類Bは、斎藤氏分類のⅢ類に、D類は、V類に相当する。Ⅲ類の代表例は蓬田大館遺跡出土土器である。氏によれば、Ⅲ類は出土遺跡・出土数が増化し、分布圏も拡大し、最大となる。北海道においても分布圏が最大となり、貼付帯を施すものが石狩低地帯を中心とする道央部に顕著であるという。このことは、蓬田大館遺跡の報告でも述べられている。氏は、分布状況からⅢ類土器を（北海道）太平洋→下北半島→陸奥湾南西岸への流入ルートを提示している。確かに貼付帯、特に馬蹄形圧痕文を施す土器は、道央部に顕著であり、本遺跡出土のものにも馬蹄形が多いことから道央部との強い関連が窺える。また、器形・文様構成で類似する資料も少なからずみられる。札幌市K441遺跡北34条地点出土土器、平取町二風谷遺跡・カンカン2遺跡出土土器、ほかに伊達市など噴火湾沿岸地域にも類似土器が見られる。このことから本遺跡の特にB類は、道央部との強い影響関係が推定される。

次に斎藤氏のIV・V類については、分布が青苗遺跡や札前遺跡など道南部日本海側に顕著であることから、日本海→十三湖→岩木川中・下流域→同上流域・大館地方への流入ルートを提示している。V類に相当する本遺跡のD類は、同類の分布状況からすれば、一つには渡島半島南西部やその地域との関連が強い津軽地域の影響が考えられ、もう一つには当遺跡の刻線文土器の中に口縁部の刺突文がほとんど施されなくなり、横走沈線化するもの（本文図215-13）が見受けられることから、本来あるべき文様の消失が起こったことも考えられるのである。

(3) 製作について 焦点となる製作の問題であるが、肉眼による観察—胎土・色調・器壁厚、文様や施文の仕方、土器使用の痕跡—などでは、特に文様要素や文様構成のほかは、北海道との類似性は希薄であり、胎土は当遺跡出土の土師器とも異なる。北海道の擦文土器は、相対的に暗い褐色を呈するものが多く、同様に器壁も薄いものが主体である。また、刻線文の施文も緻密で細く、浅いものが目立つ。このようなことから、当遺跡出土土器の多くは、遺跡内で作られたものが多いと見るのが自然である。ただ、一方で道央部の噴火湾沿岸や日高地方にかけての擦文土器に当遺跡と文様構成が極めて類似する資料も見られることから、同地域からの強い影響も考えられるのである。本報告の松本氏による胎土分析結果では、当遺跡の土師器と擦文土器とはマフィック鉱物の値で明確な違いが指摘されている。肉眼観察による両者の違いをそのまま反映した結果となつた。しかしながら、肉眼観察と化学分析結果を総合すると本遺跡出土の擦文土器は、北海道の擦文土器とも本遺跡出土の土師器とも異なることになる。この結果をどう捉えたらよいか問題となるが、本報告における安易な見解は控えたい。今後の北海道と本州側の胎土分析資料の増加を待ち、改めて検討する必要がある。

(山田 雄正)

主要参考文献

- 宇田川洋 1980 「7 擦文文化」『北海道考古学講座』野村崇・菊池俊彦編

豊田宏良 1987 「擦文土器にみる貼付圍繞帶文様の分析」『溯航』第5号 早稲田大学大学院文研考古談話会

櫻井清彦・菊池徹夫編 1987 『蓬田大館遺跡』早稲田大学文学部考古学研究室

中田裕香 1990 「石狩低地帯における擦文時代後期の土器について」『古代文化』第42巻第11号

2004 「擦文文化の土器」『擦文・アイヌ文化』野村崇・宇田川洋編

札幌市教育委員会 2001 『K39遺跡』第6次調査

齋藤 淳 2002 「本州における擦文土器の変遷と分布について」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古稀を祝う会編

塙本浩司 2002 「擦文土器の編年と地域差について」『東京大学考古学研究室研究紀要』第17号

蝦夷研究会 2005 『北日本古代防御性集落をめぐって』蝦夷研究会青森大会シンポジウム資料

鎧木琢也 2006 「擦文土器からみた北海道と東北地方北部の文化交流」『北方島文化研究』第4号 北方島文化研究会

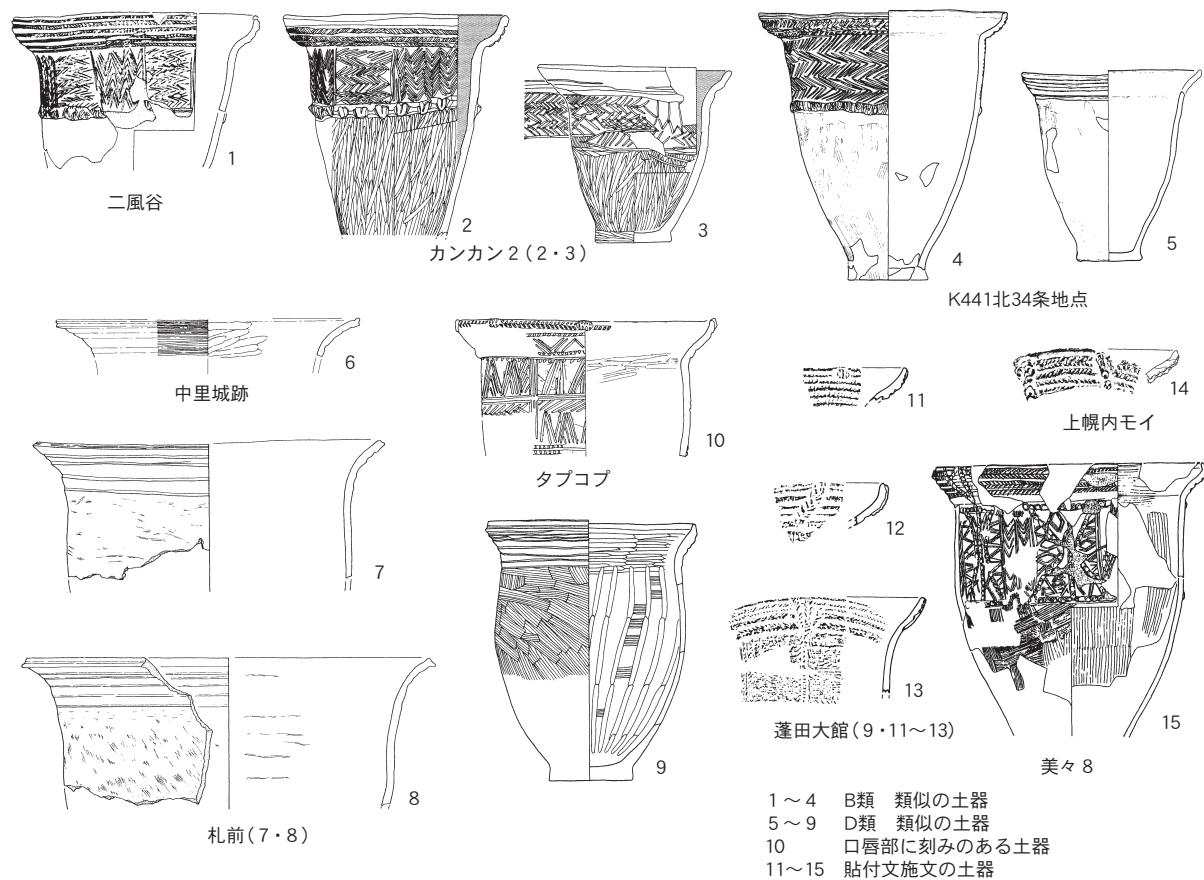


図 6 比較資料